

福岡市

都地南遺跡

～大野・二丈線改良工事に伴う調査II～

福岡市埋蔵文化財調査報告第74集

1981

福岡市教育委員会

福岡市

都地南遺跡

～大野・二丈線改良工事に伴う調査II～

福岡市埋蔵文化財調査報告第74集

1981

福岡市教育委員会



序 文

本市西南部一帯の丘陵部は萩原古墳を始め著名な古墳が群集している地域です。

近年これらの丘陵地帯にも開発事業の波が押し寄せ、消滅する遺跡の数も増加の一途をたどっております。

教育委員会では、やむをえずして保存できない文化財については事前の発掘調査をもって記録保存につとめています。

今回の発掘調査は県道大野二丈線改良工事に伴う緊急発掘調査で、昭和54・55年度に実施した調査報告書です。

本書が市民各位の文化財保護及び学術研究の分野において役立つことを念願いたしますとともに、調査に際してよせられました多くの方々のご協力に対し、心から謝意を表する次第であります。

昭和56年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美

例 言

1. 本書は県道大野・二丈線工事に伴う事前調査として、福岡市教育委員会文化課が1979年11月-12月、1980年9月-11月まで2ヶ月年発掘調査を実施した。乙石A遺跡、都地南遺跡の調査報告である。
2. 本書の執筆は松村が行った。
3. 本書に使用した図の作製、製図は松村が行い、一部、原俊介の協力を得た。
4. 本書の写真は、遺構を松村が行い、遺物を浜田昌治が行った。
5. 本書の編集は松村が行った。

本文目次

I	序説	1
1.	はじめに	1
2.	遺跡の位置と環境	3
II	調査の記録	5
1.	乙石A遺跡の調査	5
2.	都地南遺跡の調査	7
(1).	1区の調査	7
	堅穴遺構の調査	8
	建物の調査	11
(2).	2区の調査	12
	ピット群	13
	住居址	13
(3).	3区の調査	17
	建物の調査	17
	包含層の調査	18

挿図目次

第1図	周辺主要遺跡分布図	2
第2図	遺跡の周辺地形測量図	4
第3図	乙石A遺跡遺構全体図	5
第4図	1号建物実測図	6
第5図	2号建物実測図	6
第6図	乙石A遺跡出土遺物実測図	7
第7図	1区遺構全体図	8
第8図	堅穴遺構実測図	9
第9図	1区出土上器実測図	9
第10図	1号建物実測図	10
第11図	2号建物実測図	11
第12図	2区遺構全体図	13
第13図	1号住居址実測図	14

第14図	1号住居址出土土器実測図	14
第15図	3区遺構全体図	(折り込み) 15-16
第16図	1号建物実測図	18
第17図	2号建物実測図	19
第18図	3号建物実測図	20
第19図	ピット内出土土器実測図	21
第20図	包含層上層図	21
第21図	包含層出土土器実測図(1)	23
第22図	包含層出土土器実測図(2)	24
第23図	包含層出土土器実測図(3)	25
第24図	包含層出土土器実測図(4)	26
第25図	包含層出土土器実測図(5)	27
第26図	包含層出土土器実測図(6)	28

図 版 目 次

P L 1	①乙石A遺跡(調査前) ②乙石A遺跡全景
P L 2	①乙石A遺跡遺構検出状況 ②乙石A遺跡遺構全景
P L 3	①乙石A遺跡1号建物 ②1区竪穴遺構全景
P L 4	①1区1, 2号建物 ②1号建物柱穴(1号P 3)
P L 5	1号建物礫石
P L 6	①1区調査前 ②2区遺構全景
P L 7	①1号住居址 ②1号住居址出土須恵器 ③3区出土包含層出土壺
P L 8	①3区ピット群全景 ②1号建物
P L 9	①3区包含層(谷部)全景 ②包含層(谷部)土層
P L 10	都地南出遺跡土器

第1章 序 説

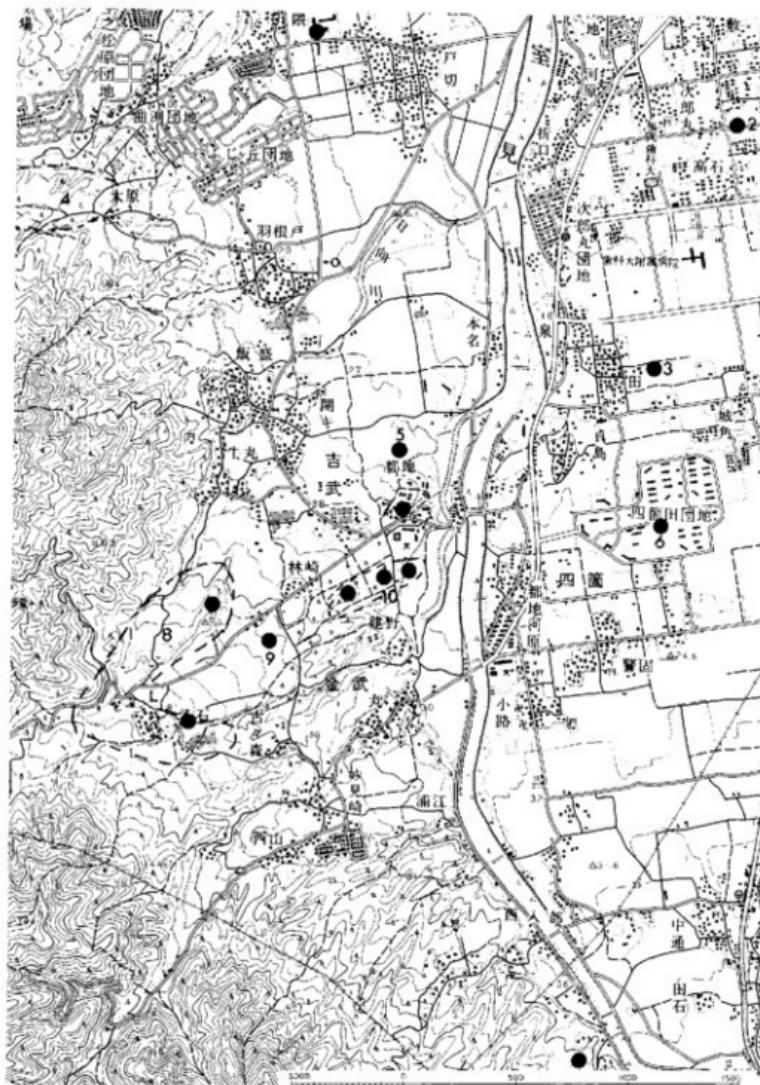
1.はじめに

早良平野および糸島平野への人口増加は急激なものがある。とくに糸島平野は地下鉄1号線の工事とともに福岡市のベッドタウンとなっている。それに伴い車の増加も著しく道路事情の悪化もあって、日常生活に不便さを与えている。202号線・202号バイパス等、各地で道路改修工事が実施されている。今回の調査は大野・二丈線の新設改修工事に伴ない、金武古墳群の調査に続くもので、金武及び都地地区の埋蔵文化財の発掘調査を実施した。調査に先立ち道路建設課より文化課への試掘の依頼があり乙石A遺跡を1979年4月、都地南遺跡を1980年8月に試掘調査を実施した。その結果、各種の遺構が確認されたので、本調査を実施する運びとなった。調査は乙石A地区を第2次調査として1979年11月4日～12月24日、都地南遺跡を第3次調査として1980年9月4日～11月23日の期間実施した。

調査は2ヶ月に亘り4ヶ月実施したが、一部未買収地区もあり、埋蔵文化財の発掘調査に了解を下さった地主の諸氏をはじめ、市道路建設課に多大な協力をたまわった。記して感謝の意を表したい。

調査の組織

調査主体	福岡市教育委員会 文化部文化課埋蔵文化財調査第1係
調査委託者	福岡市土木局
事務担当	古藤国雄
調査担当	柳田純孝 横山邦雄 浜石哲也（試掘調査） 松村道博
調査補助員	原俊一 浜田昌治（遺物写真）
調査協力者	福岡大学歴史研究部 福島建設 岡部裕俊（同志社大学） 西原組 田代定行 牛尾準一 大原義雄 牛尾クメ 典略ナミ 牛尾二三子 倉光三保 青柳恵子 牛尾秀子 結城千賀子 惣慶とみ子 古住フサノ 伊藤みどり 原幸子 結城君江 鍋山千鶴子 香月満千枝



1. 戸切遺跡群 2. 次郎丸高石遺跡 3. 田村遺跡群 4. 羽根戸古墳群 5. 高木豪柵遺跡
6. 四箇遺跡群 7. 都地城跡 8. 金武古墳群 9. 乙石 A 遺跡 10. 都地南遺跡

第1図 周辺主要遺跡分布図

2. 遺跡の立地と環境

背振山系から派生した山塊は西山、飯盛山、叶岳から北へ延び、長垂の海岸まで続き、早良平野と糸島平野とを分ける。さらに東側は油山から北に延びる飯倉丘陵によって区画された小平野部を形成する。西山（430m）から北へ延びる丘陵は室見川まで達し、ゆるやかな丘陵部を形成する。都地南遺跡は室見川の西岸に位置し、標高30～50mを測る丘陵先端部に所在する。国土地理院発行の2万5千分の一地形図福岡西南部（福岡11号-4）図幅の北隅から24.7cm、西端から27.0cmの直交する位置にあたる。

早良平野は九州の中核管理都市として膨張する福岡市のベッドタウンとなっており、地下鉄、202号線バイパス、公団、公社の大規模住宅の建設、その周辺部での民間建築住宅建設等の開発が行なわれており、それに伴い埋蔵文化財の発掘調査が実施され、昭和47年の有田遺跡の調査を始め、有田・小田部、下山門・野方・拾六町周辺、四箇周辺、藤崎・西新周辺など低丘陵、低湿地、砂丘地にわたって行なわれている。とくに有田・小田部遺跡群及び四箇遺跡周辺部は個人の家屋建て換え等を含む小規模開発にも目を向け、国庫補助事業として調査を実施して、多大なる成果をあげている。以上のように数多くの遺跡が調査されて、周辺の歴史的環境について各々報告書に詳細に論功されているので、さらに付け加えるものもないで、本書では割愛し、それらの報告書の一覧を記載する。

—参考文献—

「有田遺跡」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第2集	1963年
「人谷古墳群」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第19集	1972年
「金武古墳群調査報告書」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集	1971年
「影塚1号墳発掘調査報告書」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集	1972年
「下山門遺跡」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集	1973年
「牛多田遺跡」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集	1974年
「四箇周辺遺跡調査報告(1)」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集	
(2)	タ	47集
(3)	タ	51集
「鶴町遺跡」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集	1976年
「広石古墳群」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集	1977年
「県道大野・二丈線関係埋蔵文化財調査報告書 1」		
	福岡市埋蔵文化財調査報告書第52集	1980年
「吉武・熊山古墳群」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集	1980年
「有田・小田部」第1集	福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集	1980年

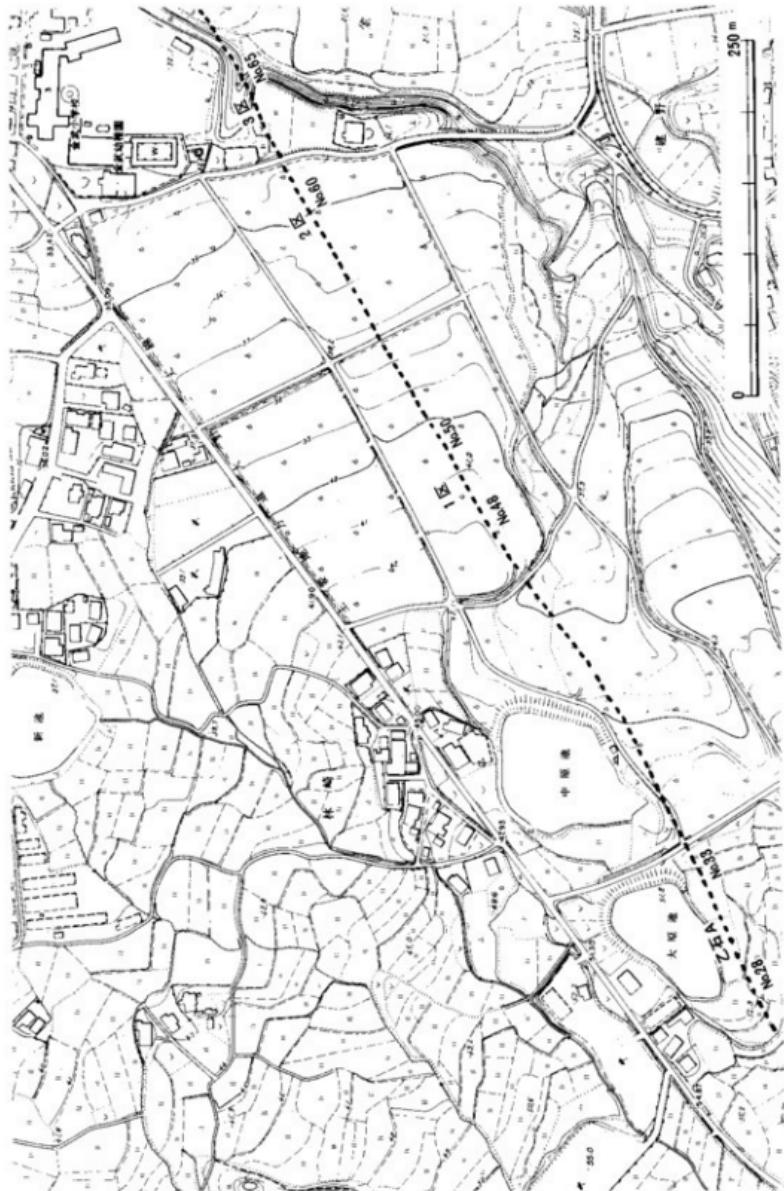


図2 周辺地形測量

第2章 調査の記録

1. 乙石A遺跡の調査

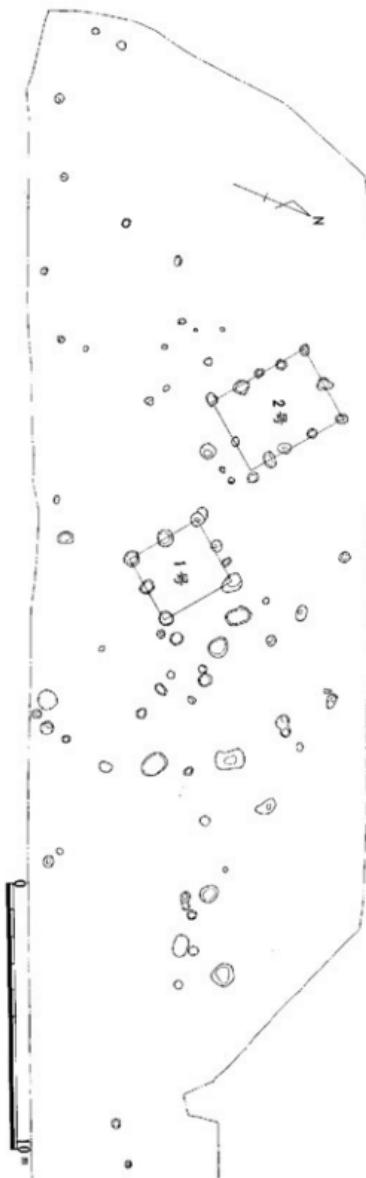
試掘調査時に未買収地域があり、試掘を実施していない地区もあり、その部分にトレンチを入れて調査を行ったところ、遺構・遺物の出土がほとんどなく、調査対象から除外した。調査は道路建設の基本杭が20m毎に打たれており、その番号を使い、No.28~33まで延べ約1500m²の発掘調査を実施した。遺構はNo.28~30までの部分で確認され、それ以東は検出されなかった。

現在水田となっており、從来ならかな丘陵を呈していたものが階段状台地と変化し、旧状をとどめていない。土層は耕作土の下がすでにローム層あるいは疊混りの粘質土となっており、水田化される時に大きな削平を受けたと思われる。

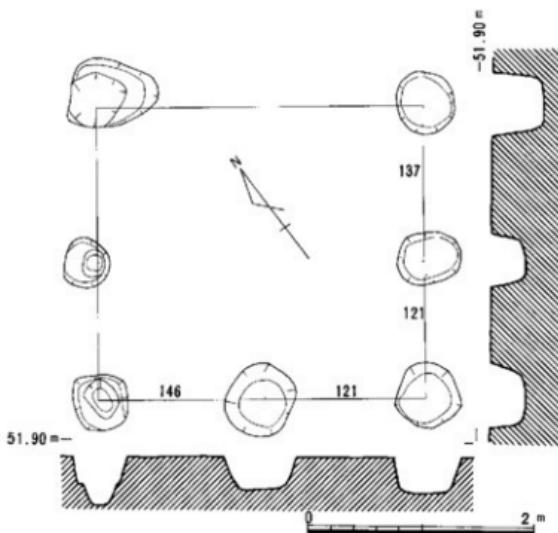
建物跡

1号建物（第4図 PL 3 ①）

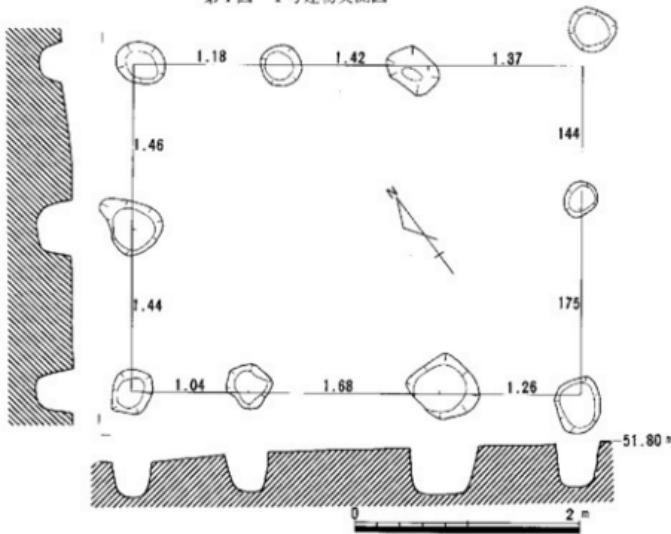
調査区の北西に位置する。径45~60cm、深さ35~45cmの柱穴で構成される。西側の柱穴2個は2段に掘削されているが他は素掘りである。建物は2間×2間のはば正方形をとる。柱間は121~146cmを測り、各柱間での統一を欠く。北側の中央部には柱穴を欠き、全体的に不自然であるが、北側へ続く柱穴は確認されず、この規模で終結するものと考えられ



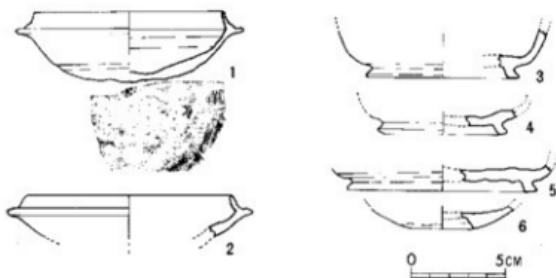
第3図 乙石A遺跡遺構全体図



第4図 1号建物実測図



第5図 2号建物実測図



第6図 乙石A遺跡出土七器実測図

る。主軸はN53°Wを測る。出土遺物はなく、時期不詳。

2号建物（第5図）

1号建物の西約2.7mに位置する。径約30~50cm、深さ約20~40cmの柱穴で構成され、2号建物の柱穴より一回り小振りである。東隅の柱穴だけが軸線より離れているが、他は直線的に並ぶ。桁行3間×梁行2間の小型の建物である。柱穴間は梁行間が1.44m前後を測るが桁行間は1.04~1.68mを測り、長短変化を有する。主軸はN54°Wを測り1号建物と同様、かなり西方へ寄っている。

出土遺物（第6図）

遺構検出時に出土したもので、遺構内からの出土はない。1~5は須恵器の杯である。1、2は蓋受け部が内側へ強く内傾する。底部約2cmはヘラケズリの後ナデ調整を施す。胎土には砂粒を多く含み、あまり良好ではない。色調青灰色を呈し、焼成は良紅である。3~5は高台付杯の底部破片である。いずれも貼付高台で外側にハコ字状に開く。3、5は蓋付部が角ばり、4は丸朱をもつ。胎土、焼成は良く、色調青灰色を呈す。6は白磁の皿である。底部が枝をもって窪む上げ底を呈する。胎土は精選され良好で、白色を呈し、釉は水色を帯びた濁白色を示す。底部から体部にかけては無施釉である。

2. 都地南遺跡の調査

試掘調査により3ヶ所の調査区が設定されて西側の高い方から1区（No.48~50）2区（No.57~61）3区（No.62~65）と名称が与えられていた。1、2区はブドウ園となり、階段状の地形を示し旧状を保っている部分は少い。それに加えて縦横に数条幅約2mの溝が走っており、遺構の遺存は極めて悪かった。さらに10mといつた限定された面積では、残存している遺構での全体の把握は困難であり、2区のように根石を有するピットが検出されても建物跡を想定するには無理なものもある。遺物は弥生時代中期頃から中世の系切り底の上師皿まであり、各時期

に恒り人間の生活の場となっていたことを想定させる。

(1) 1区の調査

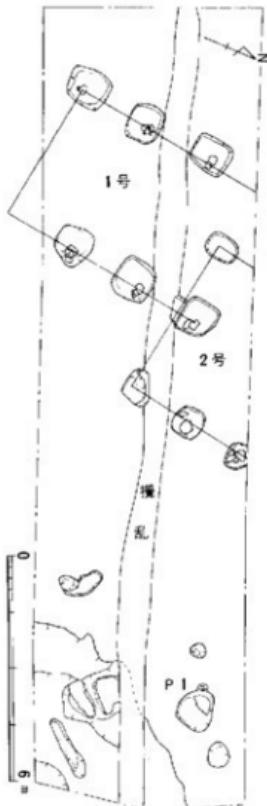
根石を有する柱穴群と不整形圓形窓穴が検出された。中央部より北側はブドウ用の溝、および造成工事より削平を受け、南側部分だけの調査を実施した。丘陵頂部に位置し、標高約43mを測る南へゆるやかな傾斜をなす。

1号竪穴 (第8図、PL 3(2))

調査区の東端に検出された。遺構の東端はブドウ畠の段落ちになり明らかではない。さらに南側は調査区外に延びており全体の様相を明らかにすることはできなかった。現況で調査区南側から東へ弧形を描いており、東西2.17m、南北2.11mを測る。西北部から南東部にかけてゆるやかな傾斜を示し南東部で急峻な傾きを呈する。その北西部には幅約0.13m長さ0.87m深さ20cmを測る。細長い溝状窓みが南西から東北方向に直線的に延びる。北西部の縁に添って炉址状の焼土が検出された。炉址部は皿状の窪地をなし東西約1.16mを測る不整形を示す。その中に焼土は床面から0.04m~0.05mの厚さに堆積し東西に延る幅0.13mの細い溝で南北に区分されている。焼土の範囲は北側部で0.59×(0.29)、南側が0.53×0.16mを測る。床面は焼けていない。遺物は焼土内をはじめ、全体から出土しているが小破片が多く実測に耐えるものは、極めて少い。

出土遺物 (第9図1~7)

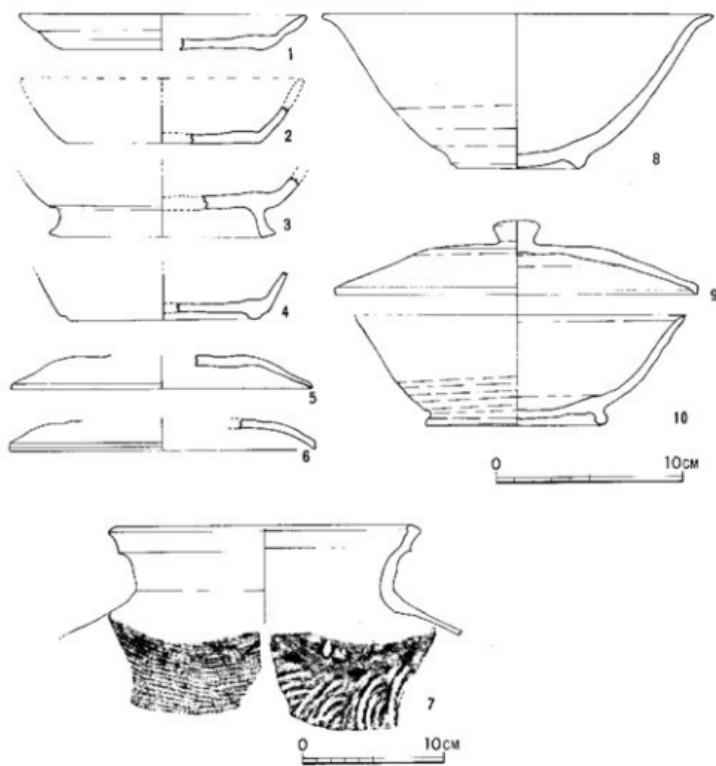
1、2は土師器の皿である。底部はヘラ切りを行い、その後ナブ調整を施す。平底からゆるやかに体部が開き胎土は砂粒を含み、焼成はよくない。色調淡褐色を示す。3、4は貼付高台の杯である。3はハの字状に外側に大きく開く高台部を有し、上端部が丸く収る。4は短く丸い高台部がつく。焼成は良く青灰色をしている。5は土師器の蓋である。平坦な天井部からゆるやかな体部と



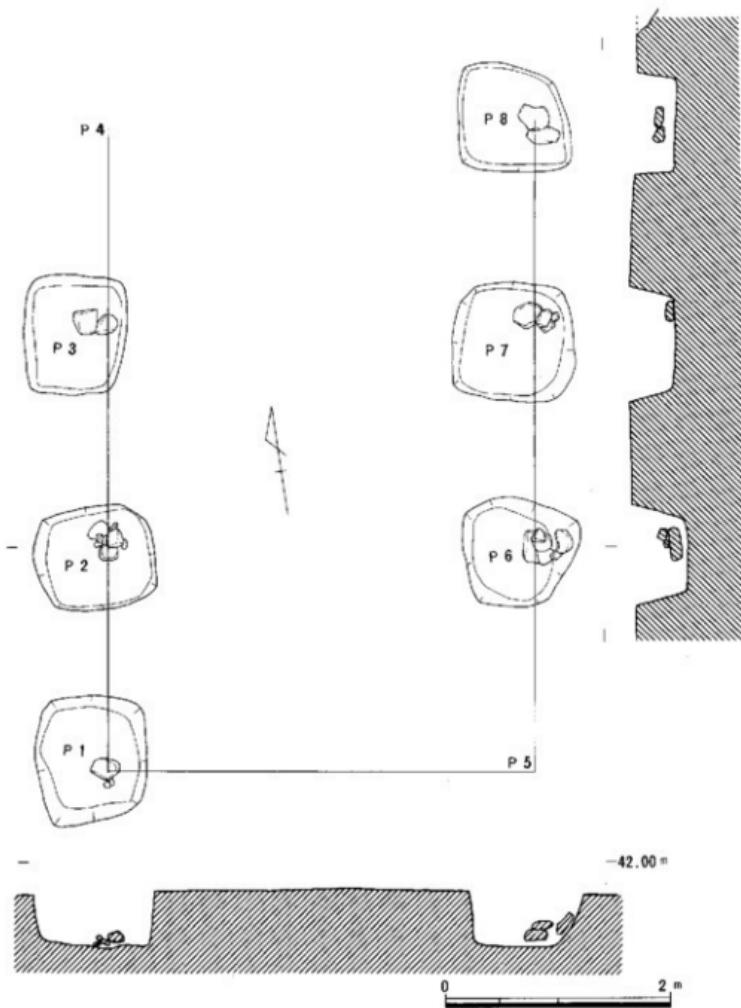
第7図 1区遺構全体図



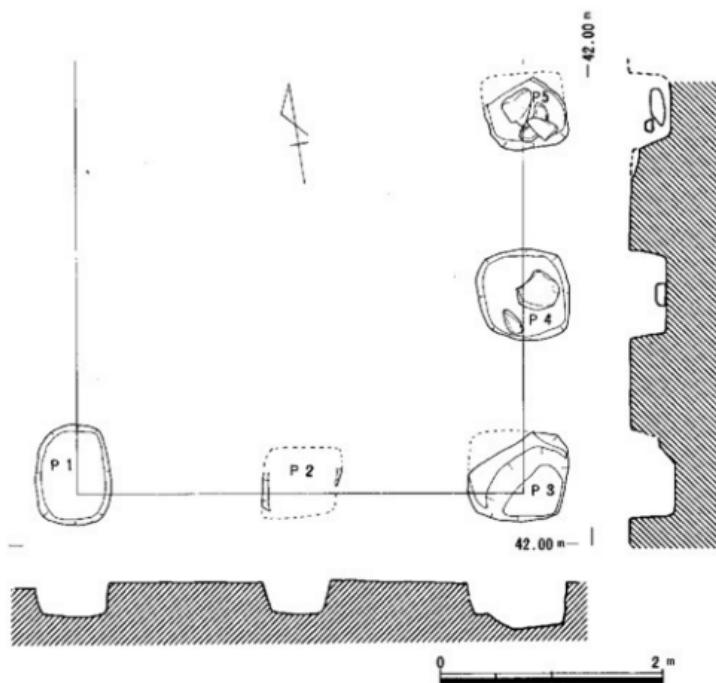
第8図 墓穴実測図



第9図 1区出土土器実測図(1~7—堀穴, 8—ピット, 9,10—試掘)



第10図 1号建物実測図



第11図 2号建物実測図

体部となり、稜を有する段となり丸い口縁部となる。保存状態が悪い。7は甃の口縁部から脚部にかけての須恵器片である。口縁部は肥厚し、頭部の中ほどに稜を有する段をもち屈曲し、脚部となる。

I号建物（第10図、PL4 ①）

調査区の四側に位置する。南側が未発掘で北側が削平を受けているため、桁行が一部明らかでないが、おそらく桁行1間×梁行3間の建物と考えられる。柱穴は短辺約0.9~1.0m、長辺約1.05~1.1m、深さ約0.35~0.45mを測る。ピット中央部に平石を数個据え、その周りに小石を配している。柱穴の掘り方も、他地区との異なり規模が大型で、礎石を配するなど丁寧な方法を取っている。主軸方位N8°Eを測る。各ピットの規模、柱間寸法は下記に示すとおりである。

P 1 (1.18×1.00×0.48) —— 3.80 —— (P 5) ?	
2.00	2.00
P 2 (1.08×0.92×0.45) —— 3.80 —— P 6 (1.18×1.00×0.52)	
2.00	2.00
P 3 (1.10×0.91×0.50) —— 3.80 —— P 7 (1.08×1.06×0.39)	
1.81	1.81
(P 4) ? ? P 8 (0.98×0.96×0.35)	

(単位はm)

2号建物(第II図 PL4①)

1号建物と一部重複し、少し東にずれた位置にある。北側が削平されており、調査することができなかつたので、桁行は不明であるが、梁行は2間を測り、桁行3~4間を測るものと考えられる。P 2は1号建物のP 8から切られており、1号建物より古い。P 1~P 3は素掘りの柱穴で、一辺0.70~0.90mの渦丸長方形を呈し、礫石等が見られない。P 4は柱穴のはば中央部に一辺0.35m前後の扁平な川原石を底面上に据え、ほぼ同じ高さで、壁面に寄った位置に小ぶりの石を配する。P 5は北側部分に削平を受けているが、P 4と同形態を示す柱穴と考えられる。床面より少し浮いた状態で、平石を据え、壁面近くに厚みのある根石を置く。主軸方位は1号建物と同様N 8°Eを測る。柱穴の規模は下に示すとおりである。

P 1 (0.90×0.69×0.31) —— 4.00 —— P 3 (— — —)	
2.00	1.80
P 2 (0.70 × ? × 0.30)	P 4 (0.84×0.81×0.31)
2.00	1.63
P 3 (0.91×0.80×0.42)	P 5 (0.78 × ? × 0.36)

(単位はm)

その他の出土遺物(第9図)

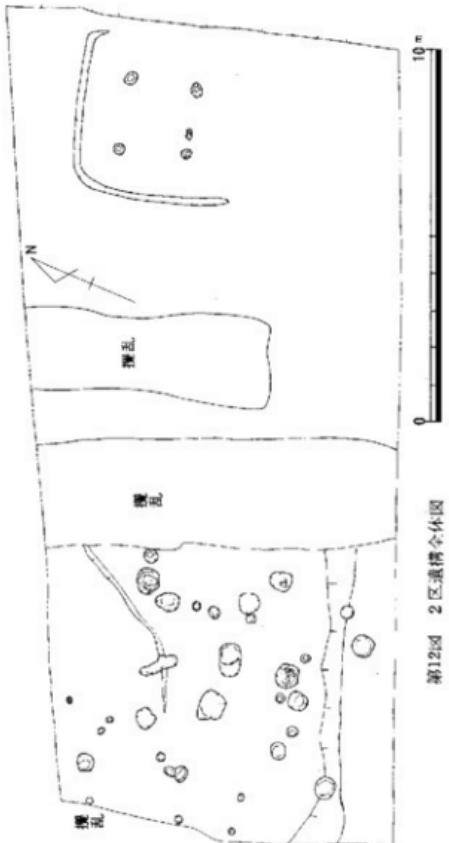
8はP 1からの出土である。土師器杯で低い貼付高台をもつ。内外面へラ研磨を施し、丁寧な調整をしている。口縁部はゆるやかに外反する。9, 10は土師器で試掘時のものである。扁平なつまみをもち、天井部と体部の境に稜を有する。口縁部は垂直に短く立ち上がり、端部は丸くなる。10は貼付高台の杯である。体部下半にヘラケズリの後ナゲ調整を施し稜線を残す。

(2) 2区の調査

標高約34mを測る西側へ傾斜した丘陵部に位置する。ブドウ園造成時に本来の形状を大きく損ない、平坦な畑地となっている。調査区の中央部に擾乱が2、さらに西東部も擾乱の構および段落ちがあり遺構の遺存状態は極めて悪い。地形は北側から南へゆるやかな傾斜をして、その比高差約0.5mを測る。遺構は中央部擾乱の西側にピット群、東側に古墳時代の住居址が検出された。

ピット群（第12図）

ピットは総数31個検出された。径0.15m前後のものから径0.60mを測る大型のものまである。大型ピットの中に、根石を有するものが二個あり、明らかに柱穴と推測されるが大きく削平を受け、消滅したピットもあり、建物跡を想定するには至らなかった。

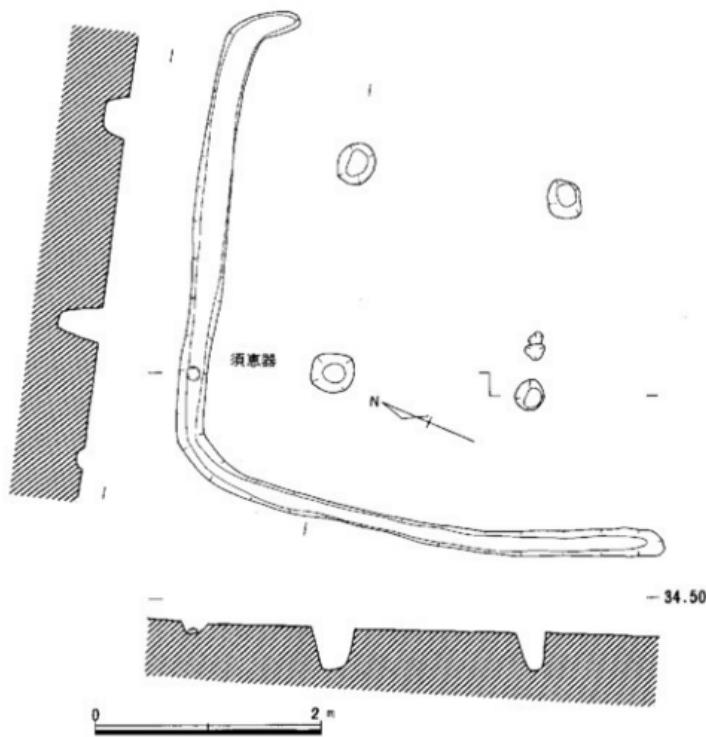


住居址（第13図 PL7）

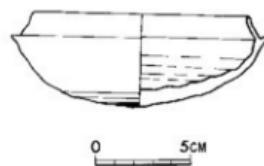
古墳時代の住居地である。壁面ではなく窓穴内の周構および柱穴4個が検出され、住居址であろう。本来は周壁が存在していたものが、削平を受けたものと考えられる。周溝は幅0.15～0.3m深さ0.5～0.1mを測り、東から北側へL字状に直角に曲る。柱穴は周壁から約1m離れ、径0.30～0.35m深さ約0.40mを測り、4本の主柱穴で構成される。床面は本来の形態をとどめていなく、踏みしめられた痕跡は認められない。

出土遺物（第14図）

周溝内の北側に伏せた状態で出土した。須恵器の杯身ではほぼ完形品である。口径11.6cm、器高5.1cmを測り、体部は右方向へのラケヅリ、それより上はヨコナデ調整を施す。口縁部は丸く取り内傾する。胎土には5mm位の砂粒を多く含み不良であるが焼成は良好である。色調青灰色を



第13図 1号住居址実測図



第14図 1号住居址出土須恵器実測図



第15圖 3區地圖全體圖

呈する。

(3) 3区の調査

台地部の突端に位置し北東部は急峻な崖面を形成し、平野部との比高差は約15mを測る。

この地区だけが水田である。全体の削平は受けているが攪乱などもなく、比較的良好な状態で遺構が検出された。

多数のビットが調査区中央から東側にかけて密集して検出されたが、その中で整まりをもち建物を想定できたのは、据立柱の建物跡3棟である。他に谷状地形から弥生～鎌倉時代の包含層が確認された。建物は礎石等を有せず、素振りのもので、平面形が円形、長方形の二種類がみられる。また円形の小ビットからは弥生後期の器台も出土しており、その時代の住居址の存在する可能性もある。

1号建物（第16図、PL8）

調査区のほぼ中央部に検出された。南側は調査区外に延びており全容は明らかではないが、おそらく3間×3間、桁行7.00m、梁行6.40mを測るほぼ正方形の建物と考えられる。柱穴は径0.4～0.5m、深さ約0.35mを測る柱穴で構成である。P4は底部に角礎3個を根石状に配する。柱間距離は2.00～2.50mを測り長短種々みられ、統一性に欠ける。主軸方位はN90°Eを測り、東西方向をとる。各柱穴の規模、柱間寸法は下記に示すとおりである。

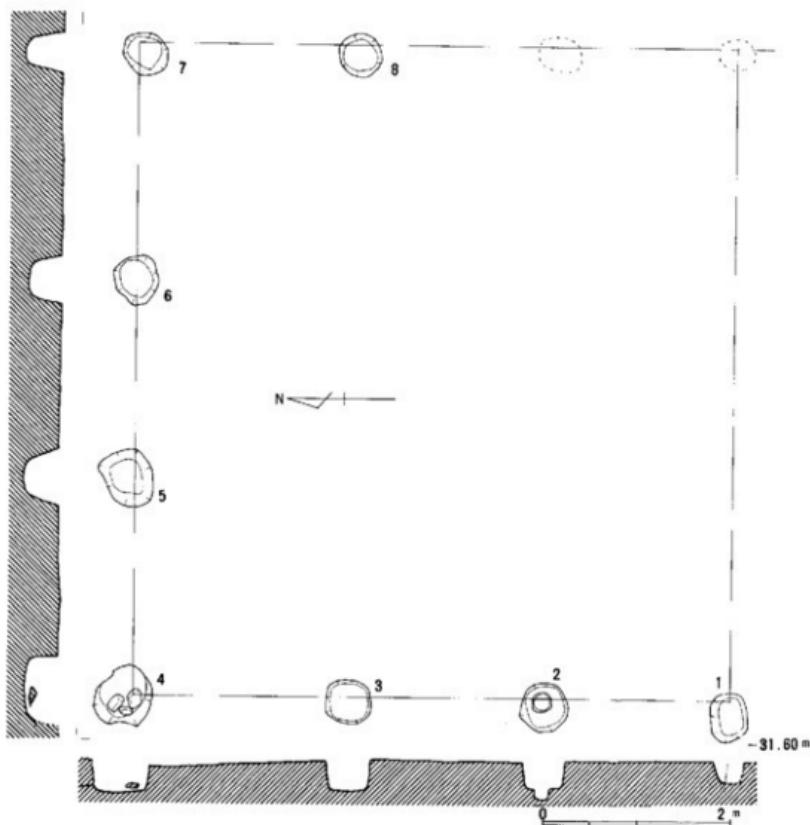
P 1 (0.51×(0.23)×0.24)	—	6.40	—	—	—	—
2.00			2.30			
P 2 (0.53×0.51×0.40)			P 5 (0.62×0.51×0.41)			
2.10			2.20			
P 3 (0.48×0.46×0.33)			P 6 (0.54×0.46×0.37)			
2.30						
P 4 (0.64×0.62×0.27)	—	7.00	—	P 7 (0.46×0.48×0.40)		
					2.36	
						P 8 (0.47×0.45×0.37)

(単位はm)

2号建物（第17図）

1号建物の東側に隣接して検出された。3P部分は試掘トレンチにより約0.20mほど削平を受けている。1間×2間の小型の建物であるが、1、3号建物と異なり柱穴が大型で平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長辺が約0.80m、短辺が約0.60～0.80m位で、深さ約0.60mほどを測る。3、6Pは二段に掘り込まれ柱の位置を示すものと考えられる。主軸の方位は磁北方をとる。各柱穴の規模、柱間寸法は下記に示すとおりである。

P 1 (0.64×0.57×0.46)	—	2.61	—	P 4 (0.63×0.73×0.49)
				2.40



第16図 1号建物実測図

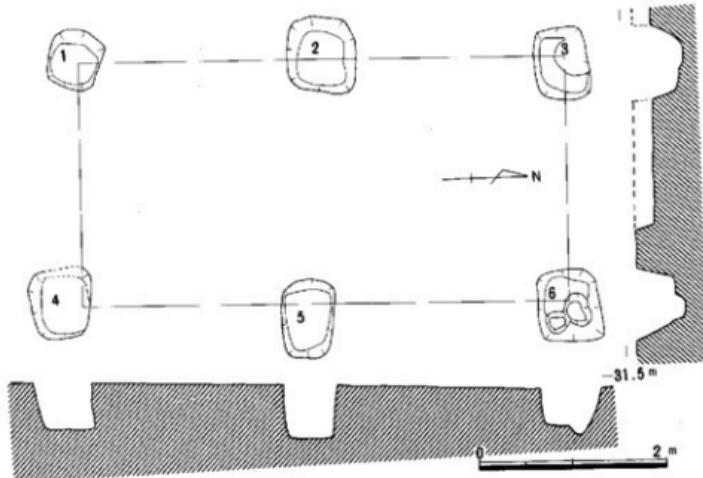
P 2 (0.80×0.73×0.48)	—	2.61	—	P 5 (0.57×0.84×0.58)
2.63				2.78
P 3 (0.78×0.59×0.34)	—	2.61	—	P 6 (0.67×0.78×0.54)

3号建物（第18図）

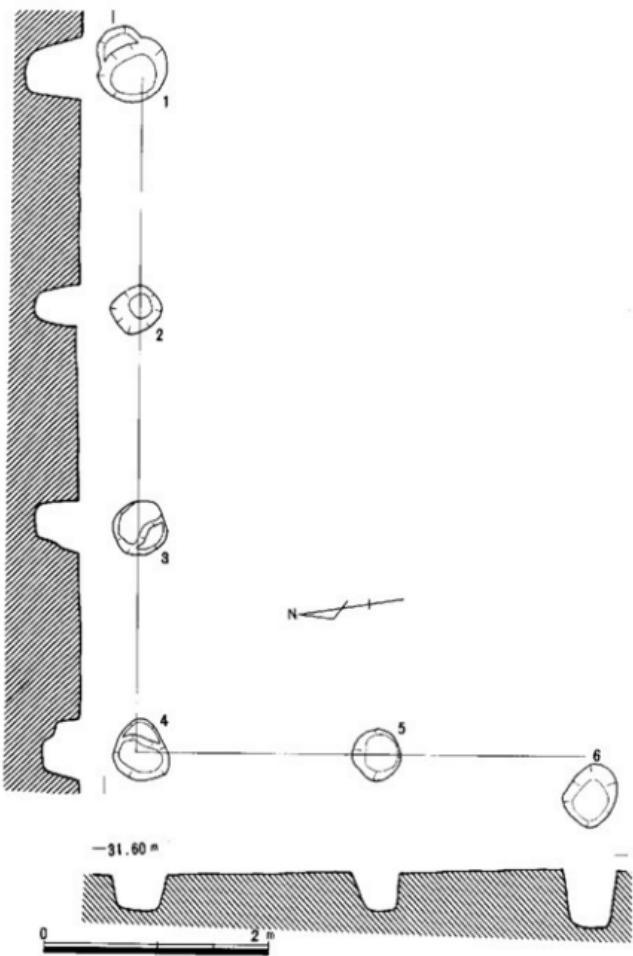
2号建物の東約1.9mに位置する。南側は調査区外になっているので桁梁行とも明らかではないが、おそらく1号と同じくほぼ3間×4間の建物であろうと考えられる。柱穴は径0.40～0.50m、深さ約0.30～0.50mを測る。各柱穴は整然と並ぶが、P 6だけが軸線よりはずれる。柱穴間距離は1.90～2.10mの中に収まる。主軸方向はE 9°Wをとる。各柱穴の規模柱間寸法は下記に示すとおりである。

P 1 (0.61×0.58×0.52)	—	7.19	—	P 4 (— — —)
2.44				
P 2 (0.43×0.38×0.40)			2.60	
2.40				
P 3 (0.48×0.48×0.38)			P 5 (0.46×0.42×0.34)	
2.35			2.12	
P 4 (0.50×0.54×0.32)			P 6 (0.54×0.44×0.51)	

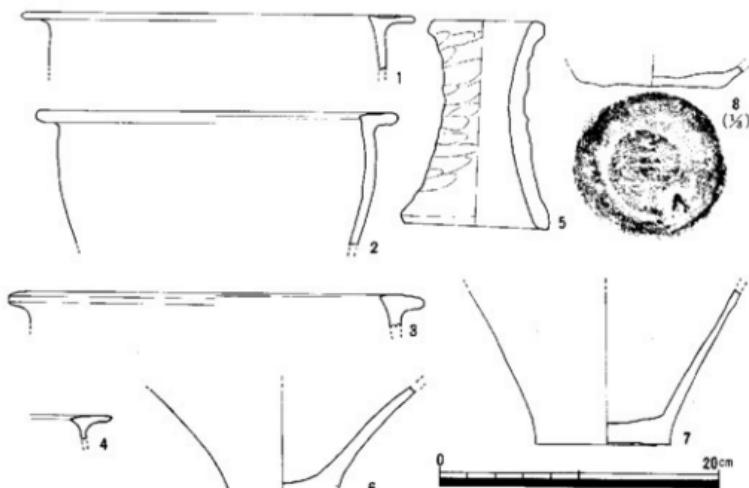
(単位:m)



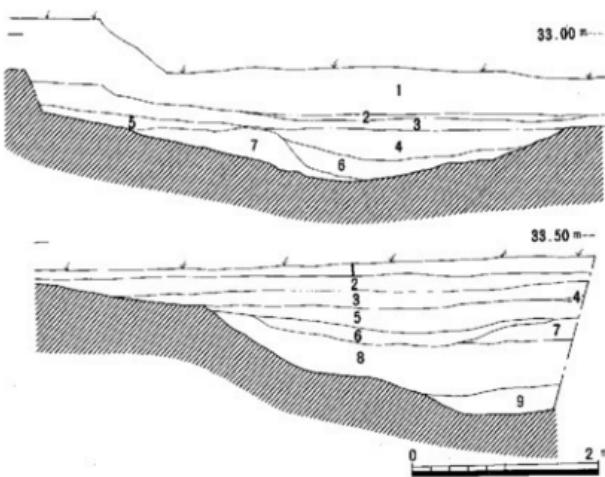
第17図 2号建物実測図



第18図 3号建物実測図



第19図 ピット出土土器実測図



第20図 包含層土層図

ピット内出土土器（第19図）

1～4は口縁部が平坦な變形土器である。口縁部上端が窪むもの（1）、内傾するもの（2、4）、外傾するもの（3）、に分けられる。保存状態が悪く器面が剥離し調整は明らかではない。5は器台で外面に指による調整の跡が明瞭に遺存する。器表面は荒れて、焼成不良。8は土師器の皿で、底面に鱗状圧痕がかすかに認められる。胎土に砂粒を多く含み、焼成は悪い。

包含層の調査（PL 9①）

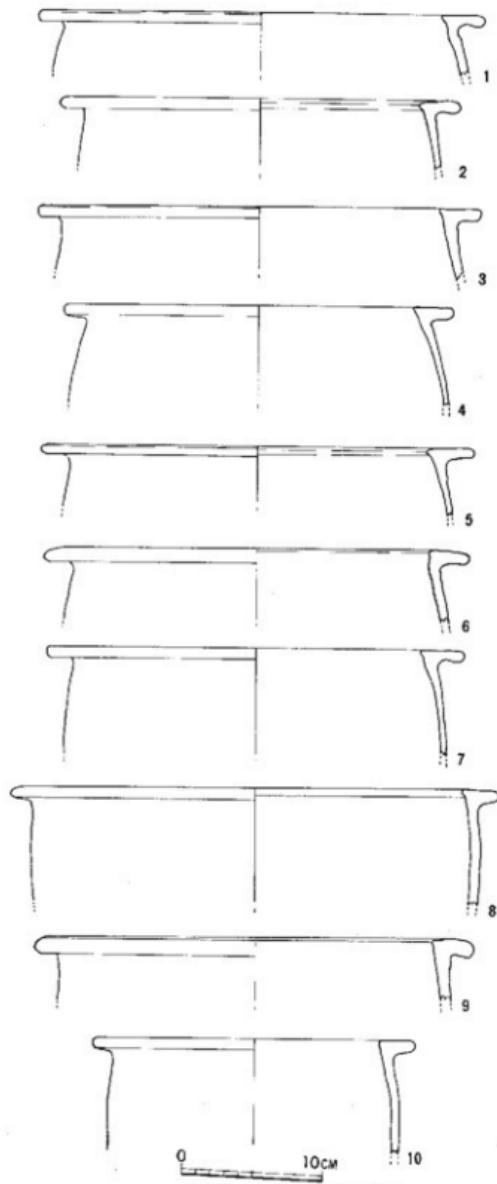
先述したように、調査区は山地となり平坦な面を保っていたが、西側はしだいに傾斜し、溝状地形となり、調査区北側の谷部と連続していることが判明した。その結果、3区は東西を限られた舌状丘陵状を呈していたものと推定される。溝状を示す谷部は調査区の西側まで延びており、道路敷下で立ち上がると思われる。北側で最大幅をもつ約5.3mを測り南側に行くにつれて、幅を狭める。深さ約1.8mを測り、断面U字形をなす。

土層（第20図、PL 9②）

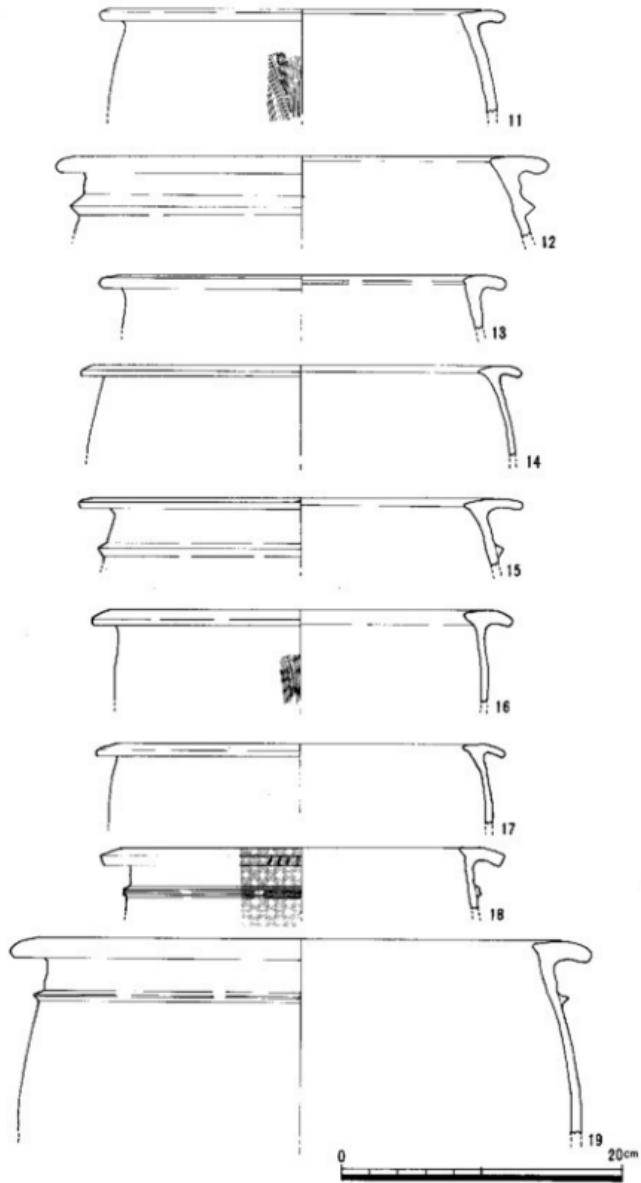
調査区南壁では、I層—耕作土、II層—床土、III層—褐色砂質土、IV層—黄褐色砂層、V層—黄灰褐色砂質土、VI—スラッグ層、VII—灰白色粘質土、VIII—砂疊層（土器包含層）の堆積を示す。スラッグ層は調査区の中ほどまで広がり、南側が厚く、北へ行くにしたがい薄くなり、消滅する。このスラッグの層は一時期に堆積したものと思われ、質感、形態等から精練土と考えられる。南側に製鍊炉の存在の可能性が強い。土器はこのVI層から溝底までの間に包含され、VIII層の中から特に多く出土した。

出土遺物（第21～第26図）

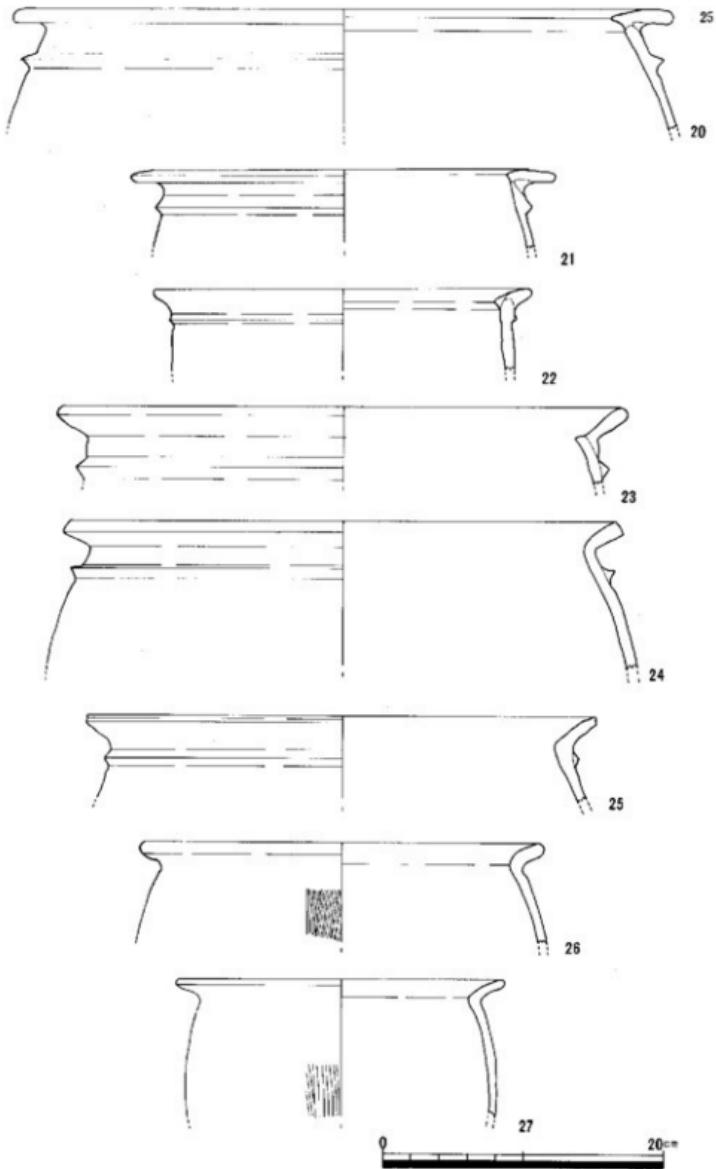
1～25は変形土器の口縁部である。形態によりいくつかに細分できる。1～10は口縁部上端が平坦な一群である。口縁部外端は丸く取まり、内面への発達は少い。胸部から口縁部にかけては垂直あるいは少し内傾する。口縁部周辺はヨコナデ調整が施される。11～21は口縁部上端が丸くレンズ状を呈する一群である。三角突帯を胸部に貼り付けるものとみられる。口縁部外端は丸く取まり、内側への発達も大きいものがある。18は一点だけが丹塗で、端部が角張り、刻目をめぐらす。20は口縁部の内傾が強く、他の土器と比べて大型で、あるいは小児用便盆の可能性もある。焼成は良く、胎土も精選されている。22、23は口縁部の内側の内傾が強く、くの字口縁を有するものである。口縁直下に一条の三角突帯をめぐらし、口縁端部は丸く取る。24～25は頸部が丸くなり頸部直下に三角突帯を貼りつけている。24は頸部から口縁部にかけて器壁が厚くなり、端部が角張っている。25は口唇部が窪む。26～28は内窓する胸部から強く外反し口唇部が丸く取る。26、27は胸部に刷毛調整を行う。29、30は小形の瓶形土器である。胴～底部の破片であろう。ほとんど器面が剥離しているが、丹塗の横痕跡が観察できる。33～40は壺、甕の底部破片である。33は外面に荒い刷毛調整を施す。38は内面の底部近くから、下か



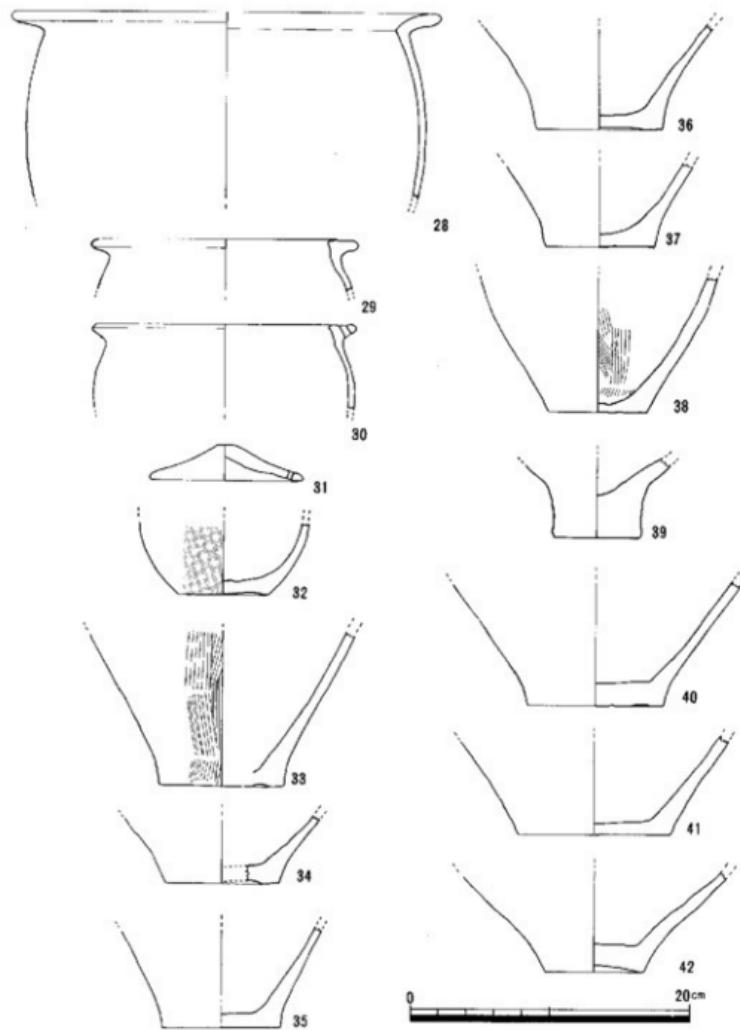
第21図 包含層出土土器実測図（1）



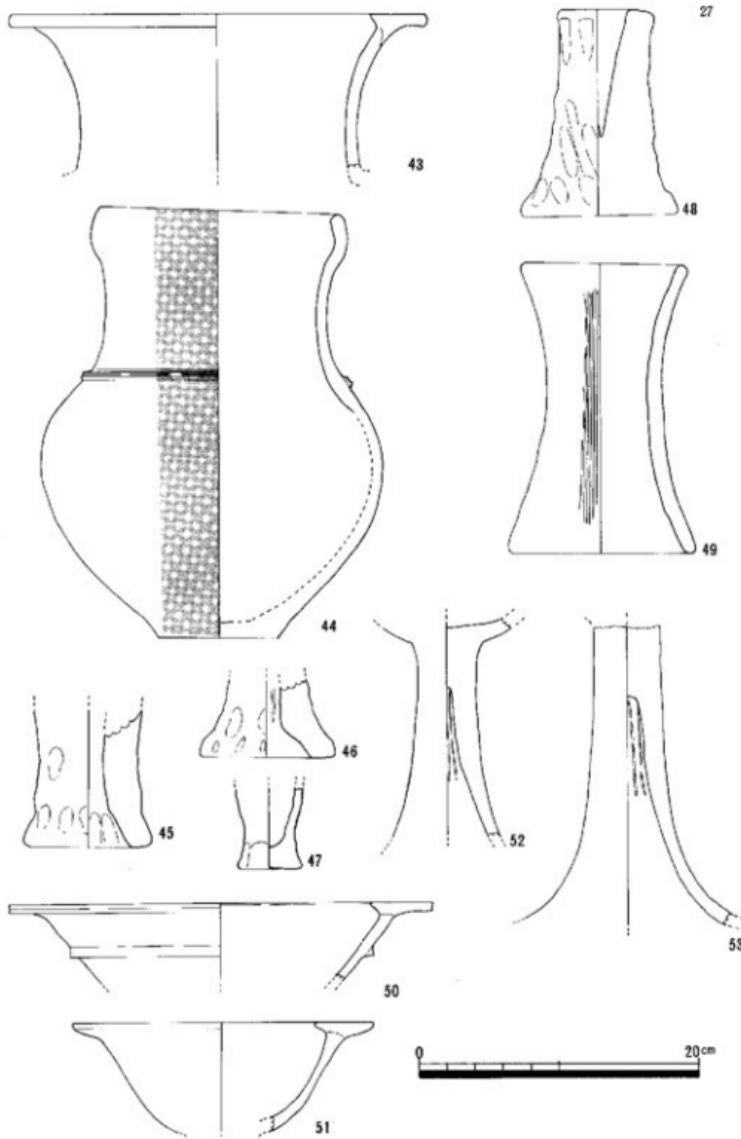
第22図 包含層出土土器実測図(2)



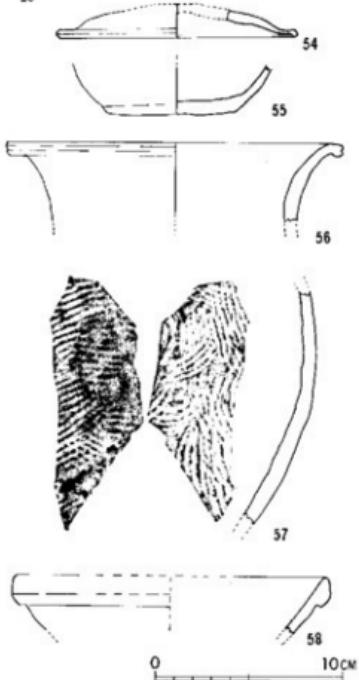
第23図 包含層出土土器実測図(3)



第24図 包含層出土土器実測図（4）



第25図 包含層出土土器実測図（5）



第26図 包含層出土土器実測図（6）

は白色を呈し、袖は薄く乳白色を示す。口縁部は玉縁状の折り返し口縁となる。

まとめ

乙石A遺跡からは掘立柱の建物2棟が検出されたが、時期を明らかにする遺物が出土していない。しかしながら、周辺から出土した遺物を観察すると須恵器編年の中～後期、13世紀前後の白磁が出土しており、奈良～平安時代の建物と推定されよう。都地南遺跡からは1区1・2号、3区2号建物が検出され、一辺約1m前後の方形柱穴で構成される。一般的な集落の柱穴としては規模も大きく、礎石を配するなど造り方も丁寧である。残念なことに柱穴から遺物が出土していないのが、おしまれる。周辺から出土した遺物を観察すると、最も新しいもので中世の糸切りの土師皿があり、その時期のものであろうか。遺跡の北約500mの位置に都地氏の居館と推定される都地域跡もあり、その関連性も考えられよう。都地南遺跡の3区からは、弥生時代から中世に至る土器包含層が確認できた。弥生式土器は中期～後期のものである。一点だけではあるが、丹塗の壺の完形品が出土している。隣接する金武小学校の運動場は甕棺遺跡として知られ、3区の周辺に生活址あるいは祭祖跡が存在するのかも知れない。それらが掘立柱の建物を造る時に西側の谷部に棄てられたものであろうか。

ら上の方向に荒い刷毛調整を行い刷毛目は、そのまま残存する。43、44は壺形上器である。44は床面から出土したもので、外面に丹塗を施すが、ほとんど剥落している。頸部と胴部の境にM字突帯をめぐらす。頸部のすぼまりは弱く、口縁部ほどより少し狭いだけで、特異な形態を示す。45～49は器台である。48は中央部の孔が貫通しておらず、上端から2分程のところでとまっており、先端は銛角となっている。器表面には指の調整痕は縱方向に残り、かなり凹凸を示す。50～53は高杯である。50は幅広の口縁帯を有し、杯部中ほどに三角突帯をめぐらせ、直線的となる。外端部は角張り、中央部が窪む。51は深いもので、口縁外端部は丸く收められている。

55は上器の皿である。底部は糸切りと考えられるが器面の剥落が著しく不明。56、57は須恵器の甕破片である。56は口唇部に浅い凹線を有し、肥厚する口縁部である。焼成は良く、青灰色を呈する。57は胴部破片で内外面にタタキ目を残す。58は白磁である。胎土

図 版
PLATES



① 乙石A遺跡（調査前）



② 乙石A遺跡、都地南遺跡全景



① 乙石A遺跡遺構検出状況



② 乙石A遺跡遺構全体図



① 乙石A遺跡1号建物



② I区堅穴遺構全景(都地南遺跡)



① 1区1, 2号建物



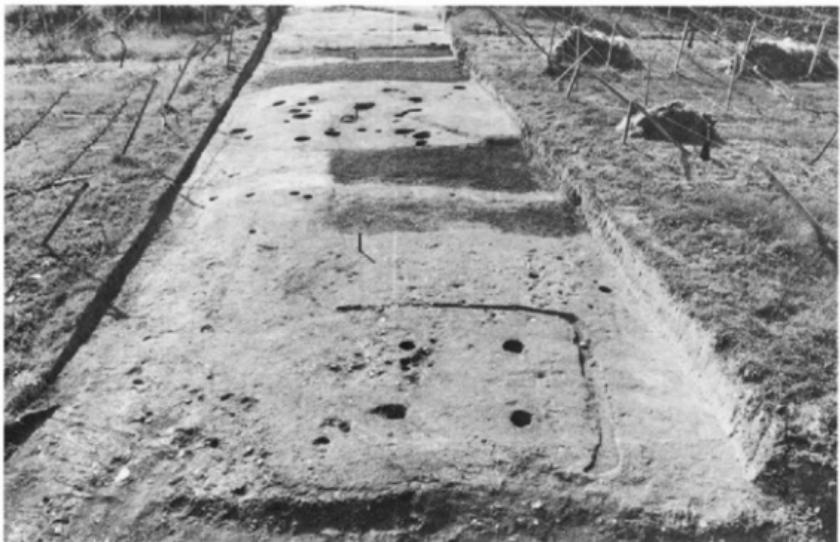
② 1号建物柱穴 (1号P 3)



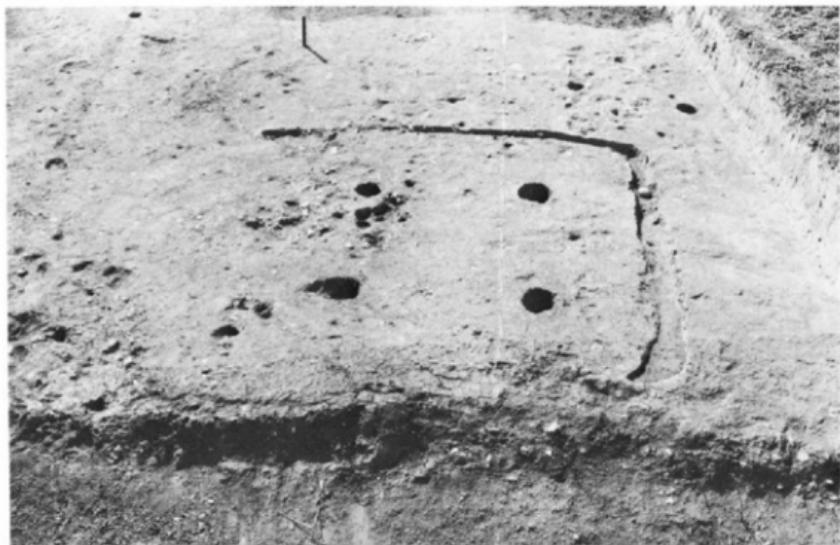
1号建物礎石



① 1, 2 区調査前



② 2 区遺構全景



① 1号住居址



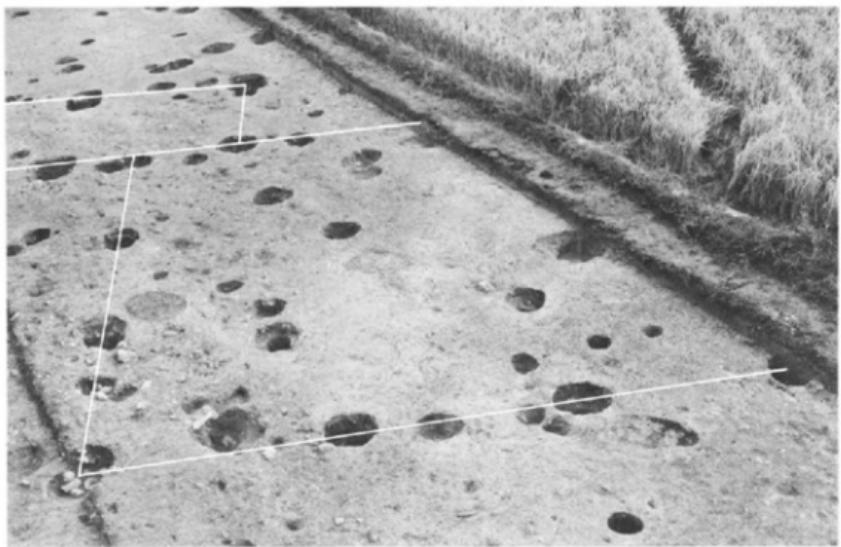
② 1号住居址出土贝器



③ 3区出土包含层出土器



① 3区ピット群全景



② 1号建物



① 3区包含層（谷部）全景



② 包含層（谷部）上層セクション（南壁）



都地南遺跡出土土器

1
2
3
4

5
6
7

8

福岡市都地南遺跡
～大野・二丈線改良工事に伴う調査II～

福岡市埋蔵文化財調査報告第74集

1981年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社 チューワン
